

JACTFL
—10年の成果と今後の課題—
JACTFL:
Developments of the first 10 years and issues for the future

吉田 研作 YOSHIDA Kensaku¹

JACTFL10年に思う

JACTFLの設立は日本の外国語教育にとってどんな意味があるのでしょうか。日本の外国語教育は、第2次大戦後英語中心に展開してきました。山本氏(1999)²が大学生にバイリンガルと聞いたら何語と何語を話す人を思い出すかと尋ねたところ、ほとんどの学生が英語と日本語と答えました。23年後の2022年9月に筆者は同じ質問を高校生にしてみました。答えは同じでした。英語の大切さについては誰も疑う人はいないでしょう。しかし、世界には7000以上の言語が存在します³。なのにほとんどの日本人はバイリンガルといえば英語と日本語ができる人、と考えています。学習指導要領の変遷を見ると「外国語」は英語だけではなく、ドイツ語とフランス語も具体的なカリキュラムが提示されていた時期が長く続きました。しかし、日本により近い国の中国語や韓国語は含まれていませんでした。その後、英語以外は具体的な言語を明記しない形で、「その他の言語」にまとめられてしまいました。ある意味、なぜドイツ語なのか、フランス語なのかという疑問を回避し、あらゆる外国語を含めた、という発展的な決定だったのかもしれませんが、しかし、実際には、英語以外の外国語はほとんど無視されてしまうことになったのです。

JACTFLは、そんな中で、多言語、多文化教育を推進するために、中高において第二外国語を正式な教科として導入することを目指して様々な活動をしてきました。文部科学省も、英語以外の外国語の教育の大切さは認識し、英語以外の外国語教育の現状を把握し、今後どのようにすれば良いかについて検討するための具体的な事業として「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」の一環としての「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業」を推進しており、英語以外の外

¹ 所属：日本英語検定協会 Eiken Foundation of Japan

² 山本雅代編(1999)『バイリンガルの世界』大修館

³ Ethnologue--Languages of the World (<https://www.ethnologue.com/> October, 2022)

国語教育の研究を推進するために毎年複数のグループが研究を進めています。そしてその成果は JACTFL のシンポジウムで発表されてきました。

これまでの 10 年でようやく英語以外の外国語教育に対して文科省の資金的援助を確保するところまでできました。しかし、これからは、その研究から第二外国語の教科としての導入のためにいかに具体的な提言を導き出せるかにかかってくると思います。教育の内容と指導体制についてどこまでの提案ができるかが非常に大切になってくるでしょう。そんな中で JACTFL は、研究を進めている各研究班の成果をどのようにまとめて文科省への提言を作り上げるかという大きな役割を果たさなければならないのではないかと思います。これからの 10 年の内にその成果を是非期待したいものです。

引用文献

Ethnologue <https://www.ethnologue.com/>

山本雅代編(1999)『バイリンガルの世界』大修館